

日病薬の最近の動き(22)

学術委員会の活動と今後目指すもの

学術委員会
委員長 佐藤 博

平成16年度の学術委員会活動について簡単にご報告致します。まず、委員会構成メンバーですが、大幅に入れ替わりしました。担当副会長は内野克喜（以下、敬称略）です。委員長が北田光一から佐藤 博になりました。副委員長は、唯一、継続して委員である政田幹夫です。以下、委員は、赤瀬朋秀、伊藤邦彦、小野田学時、木村康浩、前田正輝です。特別委員として、宇都由美子、大上尚子、渡邊善照がおります。

学術委員会は、学術小委員会を通じた調査研究活動が主たるものです。また、日本医療薬学会の前日に日本病院薬剤師会病院薬局協議会を開催し、各小委員会の活動報告と小委員会立ち上げのための議案募集を行います。さらに学術副委員長が選考委員長となり、日本病院薬剤師会雑誌（以下、日病薬誌）編集委員会と合同で、日病薬誌に掲載された一般論文の中から優秀論文を学術奨励賞として選定し、病院薬局協議会当日に表彰します。今年は平成15年1年間を対象にしており、佐々木英久氏（東邦大学医学部附属佐倉病院）「薬剤師によるインスリン投与設計への介入」、横山紀子氏（岡山大学医学部附属病院）「小児の服薬コンプライアンス向上に向けての医師に対する薬剤師の取り組み」、井上博文氏（長野県厚生連富士見高原病院）「中小病院における抗がん剤投与管理とその支援システムの構築」および佐多照正氏（阿久根市民病院）「経管栄養チューブ使用患者への新しい与薬法の検討」の4氏に贈られました。病院薬局協議会のもう1つの目玉は特別講演ですが、今回は飯野奈津子NHK解説委員より、「患者本位の医療と薬剤師への期待」と題してやや辛口のお話を頂戴致しました。

学術小委員会は、継続が4つと新規が1つの計5つが現在活動しています。新規に関しては、通常、日病薬誌上や病院薬局協議会で公募し、その応募案件を学術委員会で検討のうえ、採択されたものが、理事会の承認を受けて成立の運びとなります。しかし、前年度は特に応募がなかったため、学術委員より小委員会を提案して、第5小委員会として承認されています。また、もう1つ、別の学術委員よりの提案で、小委員会立ち上げを企画中です（DPCにおける薬剤師のクリニカルパスと医薬品マネジメントに関する調査研究（案））。5つの小委員会についてテーマと委員長名等を以下に示します。

第1小委員会「病院薬剤部・薬局の設備、構造、機能基準の改訂に関する研究」【継続】

西岡 豊委員長（高知大学医学部附属病院）

第2小委員会「薬剤疫学的手法を利用した医薬品適正使用に関する研究」【継続】

折井孝男委員長（NTT東日本関東病院）

第3小委員会「高カロリー輸液の調製に関するガイドラインの策定」【継続】

鍋島俊隆委員長（名古屋大学医学部附属病院）

第4小委員会「院内製剤の市販化に向けた調査研究」【継続】

後藤伸之委員長（福井大学医学部附属病院）

第5小委員会「病院組織における薬剤部門の位置付けに関する調査研究」【新規】

赤瀬朋秀委員長（日本医療伝道会総合病院衣笠病院）

第1小委員会活動は、病院・診療所の新設や増改築が行われる中、その施設基準が25年前に作成されたままになっており、現状に即した「病院薬剤部・薬局の整備・構造基準の作成」にあります。特定機能病院、一般病院（急性期）、一般病院（混合型）、一般病院（療養型）および精神科病院の5つに分類して200項目にわたるアンケート調査を行い、全国の378施設より回答を得ています。

第2小委員会は、「病院情報システムに蓄積されたデータの医薬品適正使用への利用」と「薬剤疫学普及啓蒙活動」の2つの方針を元に活動しています。具体的な薬剤として、塩酸バンコマイシンを例にとり検討しています。また、平成17年度からの個人情報保護法に伴う病院情報システムに蓄積された薬剤データなどの薬剤疫学的研究に対する検討も合わせて行っています。「薬剤疫学普及啓蒙活動」については、「病院薬剤師のための薬剤疫学—病院施設で協力して医薬品データを活用しませんか—」をテーマにこれまで計8回の薬剤疫学セミナーを全国各地で開催しています。

第3小委員会は、昨年度、「輸液混合ガイドライン」を策定しています。今回は新たに「抗がん剤無菌調製ガイドライン(案)」を策定し、今後論文による根拠付けや推奨事項のランク付けなどを行って、来年の春を目途に完成させる方向で検討しています。

第4小委員会は、従来より「院内製剤の市販化」に向けた取り組みを行ってきています。これまでにカテーテル血液凝固防止に用いるプレフィルドタイプヘパリン生食製剤、ジゴキシシン低用量製剤、ワーファリンの剤形追加、プレドニゾロンの剤形追加等の成果を上げてきました。今年度は、肝細胞がん治療「無水エタノール注射剤」、メトヘモグロビン血症治療薬「1%メチレンブルー注射液」、「アムホテリシンBシロップ」の味の改良や1回量分注包装剤化、「イベルメクチン」の疥癬への適応拡大、疥癬治療外用剤「ペルメトリン製剤」の製造・輸入承認等を継続して行政や製薬業界等に働きかけることを検討しています。

第5小委員会は、最近、病院組織の改編が進む中で、薬剤部や薬局が診療支援部などの包括組織に組み入れられていくケースが全国で散見される事態を憂慮し、その独立性の必要性を改めて病院経営者や幹部らに対して訴えるために、薬剤部門の位置付けを再検討する事を目的としています。外部委員として、病院長、病院経営分析を専門とする大学教授をお願いしています。病院訪問聞き取り調査やアンケート調査を基に現状調査し、外部委員からの忌憚のない意見を集約して、今後の方策を示す予定にしています。

以上、学術委員会並びに学術小委員会の活動と今後の方向性について簡単にご報告申し上げます。また、学術委員会としては、特別委員として薬学関係者、看護学および医療情報システム関係者および医薬関連のジャーナリストを配しておりますので、今後、その方面からの問題提起も視野に入れて活動をしていきたいと考えております。また、この誌面をお借りして、新しい小委員会の案件募集をお願い申し上げます。